

黒谷上人語灯録について

戸松啓眞

法然上人の遺文は、他の祖師方にくらべると相当多いのであって、その中には自ら筆をとられたものもあり、また弟子達が筆録したものもあり、その内容としては選擇集のように教義についてあらわしたもののや、三部經釋や往生要集釋のように經文等を註釋したものもあり、また門弟やその他の人に書き送った消息等があった。これらは法然上人の滅後、その門流末學によつて漸次蒐集編纂されて傳記類の中に集録されたり、また法語消息類だけ獨立して集められたりして、それが滅後百年位の間には相當の數にのぼり、その主なるものとして傳記類では本朝祖師傳記繪詞（四卷傳）、醍醐本法然上人傳記、弘願本法然聖人繪、拾遺古德傳、琳阿本法然上人傳繪詞、法然上人傳記（九卷傳）、法然然上人行狀繪圖（四十八卷傳）等があり、主として法語消息類を集録したものとしては西方指南抄、黒谷上人語灯録がある。

このうち黒谷上人語灯録は、上人の著作、法語、消息等の殆んど全てを網羅したもの、集大成されたものということが

できるのである。しかしこのように遺文を集録したものが多く、いふことは、法然上人の門流が幾つかに分れて同じ法語を轉寫して行く間に、その教義のちがひにより或は訂正されたり加筆されたりするものも生ずるといふ結果になった。このことが上人の眞筆または原本が少ないこととあいまって、法然上人の研究をむずかしくしている理由である。しかしそれは一部のものであつて、今日のところでは主として黒谷上人語灯録と四十八卷傳と西方指南抄の三つを對照してゆけば、遺文についての眞偽、加筆、異同等が或程度はつきりするのである。

以上の三つの中で、黒谷上人語灯録即ち漢和語灯録は、その編纂者と集録の事情それに年月日も一應序及び跋文に書かれており、その上和語灯録は鎌倉時代に開版されて世に出たのであるから、古來黒谷上人語灯録が法然上人の資料として重要視されてきたのは當然である。それ故、ただ鎮西門流だけではなく、他の流派に於ても例えば親鸞聖人の門流に於て

もこれが重要視され用いられていたことは、中澤見明氏^①や赤松俊秀氏^②の指摘されたところである。

また西方指南抄は、萬治年間と元祿年間に刊行されたが江戸時代の終りまでは餘り重視されなかつたようであるが、大正年間に高田派本山專修寺に親鸞聖人書寫の眞筆本が確認されてから研究が進みその價値が認められている。しかしそれが轉寫本であるか初稿本であるか、もし轉寫本とすればその原本は親鸞聖人が集録したものか或は他の誰れかが編纂したものか等の問題が残されている。

また膨大な四十八卷傳についても、編纂者や製作年時についてはこれまで多くの異説があつたのであるが、近時研究が進み成立年時についても、法然上人の百年忌の前後に知恩院の第八代如一國師、第九代舜昌法印等により製作されたものといふことができるのである。

黒谷上人語灯録は浄土宗の第三祖然阿良忠上人の門下で、京都三條派の派祖望西樓了惠道光が集録したもので全て十八卷にまとめられている。そのうち漢語の部は十卷、和語の部五卷、それに拾遺語灯録三卷があり、三卷のうち上巻が漢語、中巻下巻が和語であるから、漢語の部は全て十一卷、和語の部は七卷で全十八卷になるのである。但し漢語の第四卷と第五卷は選擇集になつてゐるが、實際には既にこの當時印本が流布していたので略して編入されていない。また漢語の部の

はじめと、和語の部のはじめに了惠の序があり、それぞれ漢語灯録は文永十一年、和語灯録は同十二年に集録し終つたことと書かれてゐる。しかるに、拾遺語灯録三卷のうち上巻は前にのべたように漢語であり、それが漢語灯録のあとに入れられてその終りに漢語の跋文がついてゐる。それによると漢語灯録十卷ならびに拾遺上巻は、

此豫二十年來編索^③此於華夷^④慎檢^⑤眞僞^⑥而所撰集^⑦也

とある。また和語灯録五卷に拾遺語灯録の中下巻の和語が續いて七卷になり、その終りに和語の跋文があり

をよそ二十餘年のあひた、あまねく花夷をたつね、くはしく眞僞をあきらめて、これを取捨すといへとも、なをあやまる事おほからん。後賢かならずたすへし。又おつるところの眞書あらは、この拾遺に續へし。

とあるが、漢語灯録は文永十一年(了惠三十二歳)和語灯録は文永十二年(三十三歳)とした序文の年時と、編者了惠の年令と跋文の「二十餘年のあひた云々」という言葉の間に矛盾があるのである。といふのは元亨元年に了惠及び圓智によつて開版された元亨版和語灯録の終りに、「沙門了惠感歎にたえず隨喜のあまり七十九歳の老眼をのごひて書之」とあるから、了惠は元亨元年には七十九歳で文永十一年は三十二歳になるのであり、もし序文と跋とを合せ考えると、二十餘年かかつたこの語録の集録がはじめられたのは僅か十一歳頃と

いうことになり、恐らく考えられないことであろう。このことについて、既に早く中澤見明氏が指摘しておられ、恐らく兩書の編纂は了惠晩年のことであろうといい、このことは或る目的をもった文書例えば遣北越書の如き僞書に權威を持たせるために、以前というか古い年時を記した序文を加えたのであろうとのべている³³。望月信亨博士もこの書状については、その内容からして法然上人の歿後何人かの僞作したものであろうとのべている。私はその年時の矛盾については次のように考える。即ち二十餘年の間に上人の漢語、和語の遺文をあつめて、はじめに漢語十卷、和語五卷が集録されそれぞれ序文を書き、それ以後に集められたものを拾遺語灯録三卷として跋を書いたが、更にその後、拾遺語灯録の上巻を漢語灯録卷十のあとにつけて跋を加え、和文の中巻下巻を和語灯録卷五のあとに續けて拾遺の跋はそのままにして黒谷上人語灯録とまとめたために、元亨版和語灯録のはじめが「黒谷上人語灯録卷十一並序」というような不自然な形で開版されており、これは年月のへだたつて書かれた序と跋とが一つになつたために生じた矛盾と思う。しかし和語灯録が法然上人滅後百九年にあたる元亨元年に刊行されているから、黒谷上人語灯録十八巻の編纂は文永十一年十二年でないにしても上人滅後百年頃には既に成立しており、その中に前述のような僞書と思われるものや、或はまた加筆訂正されたものがあつて

も、その内容や他の二本と對照して考えれば、その多くは法然資料として用いることのできるものである。

その場合に同じ鎮西門流によって編纂製作された漢和語灯録と四十八巻傳の法語消息が編纂の過程に於て交渉があらば、對照検討する必要があるのであるが、同じく法然上人滅後百年前後に編纂された兩本が次の理由から交渉なく製作されたものと思う。即ち語灯録の編纂者は三祖良忠門下の三條派の派祖であり、四十八巻傳を中心になつて製作した舜昌法印は木幡派である。淨土傳灯總系譜、淨源脈譜、華頂誌要、知恩院史によると舜昌法印の師にあたる知恩院八代如一國師は木幡派の派祖慈心の門下で二人がちがう派にぞくしていたことからして、舜昌は元亨元年に和語灯録が開版されるまでは、語灯録の原本をみなかったのではないかと思う。とあるが、第四十五巻の一枚消息が朱筆にて訂正されており、このような訂正はこだけでありこの訂正を寫真版及び昭和⁴新修法然上人全集によつてみると、和語灯録所收の御誓言の書（一枚消息）によつて訂正されているのがわかるのである。勅修御傳とまでいわれた四十八巻傳を朱筆にて訂正できるのは編纂者であり、その上知恩院九代となつた舜昌法印以外にはないと思うのである。舜昌が師の如一國師のあと知恩院九代となつたのは、華頂誌要等によると元亨元年であるから、

元亨元年に刊行された和語灯録を入手して、それ以後に於て自ら上人の教えの歸結ともいへば一枚起請文を訂正したと考えるのである。してみると一枚起請文でもこのようなことであるから、兩本は交渉なしに製作されたということができ。更に昭和新修法然上人全集の校合を石井教道博士と共に行った大橋俊雄氏が、「四十八卷傳の成立年時について」（日本歴史一五〇號）に於て、四十八卷傳の法語類を元亨版和語灯録のそれと對照すると相異が認められ、それは直接和語灯録から援引したものでないとのべている。また江戸時代中期に正徳版和語灯録を校訂開版した義山が、かの有名な四十八卷傳についての詳細な註釋書である圓光大師行狀畫圖翼贊六十卷をかき、その中で四十八卷傳の第一卷の書きだしの文にある「あまねく舊記をかんがえ、まことをえらび、あやまりをただして、粗始終の行狀を勸するところなり。」というのを註釋して、四十八卷傳が参照した舊記をあげている。それによると、源空上人傳（十六門記）、九卷傳、十卷傳、祕傳抄、決疑鈔見聞、知恩傳、拾遺古徳傳、正源明義抄、西方指南抄をあげているが、自らが校訂開版した和語灯録をあげているのは、編纂の過程に於て交渉のなかつたことを示していると考える。そこで法然上人の法語消息等の眞偽異同を検討するのに兩本を對照することが重要であろうと思ふのである。

西方指南抄はどうかというと、これは法然上人滅後四十五

黒谷上人語灯録について（戸松）

年の康元二年に親鸞聖人によって法然上人の説法や法語消息行狀等が書寫されたものであるから、比較的古いという點からもまた眞筆であるという點からも、法然上人研究の重要な資料といふことができる。

しかしはじめにのべたように親鸞聖人の指南抄が轉寫本であるか、親鸞聖人自身の初稿本であるかといふことについては、宮崎圓邊氏や赤松俊秀氏の論作により轉寫本ではないかとのべられているが、私も次の理由から指南抄には親鸞聖人書寫の指南抄の外にも別のものがあり、それが黒谷上人語灯録や四十八卷傳の編纂過程に於ても用いられたと推考するのである。即ち漢語灯録の卷十の最後に法然上人が、法性寺空阿のおたずねに答えた消息がのつている。その題が「指南鈔云答三空阿彌陀佛二書也」とあり、空阿が瘡瘍という病氣にかかり平常の安心をたずねたのに對する上人の御返事である。これは「指南鈔云」とある通り指南鈔から援引したものであるが、親鸞書寫の西方指南抄にはないのである。更にこれと殆んど同文のものであるが、その前後が少しく短いものが四十八卷傳の第四十八卷に集録されており、その文の終りのところ「云々取詮」とあるから、この四十八卷傳のものとは何か資料があつて、それを多少抄略して詮をとつて集録したといふことがわかるのである。それが何んであるかは書いていないが、成立過程に於て交渉のない兩本が、一本は「指南鈔

云」といい、他方は「取詮」と書いてあることからすると、親鸞書寫の西方指南抄でない別の指南抄が流布していてそれから援引したと考えることができるのであり、それは恐らく法然上人滅後案外早い時期に編纂されたものであろうし、親鸞聖人が巻序に従わずに書寫した西方指南抄の底本とみることもできるかも知れぬ。

以上三本の多少の關係をのべるとともに、祖師方の傳記類は勿論、法語や消息等を集録した著作も信仰安心を求める人々の「ともしび」とせんがためのものであるから、一部分には自己の門流の立場から取捨選擇、訂正、加増などが行われたものもあるが、そのために他の多くの價値あるものまで輕視することは好ましくないのである。黒谷上人語灯録は了惠二十餘年にわたる苦心の作であつて、今日まで鎮西門流ばかりでなく他の門流に於ても教義形成の資料となつた貴重なものである。

- 1 中澤見明著「眞宗源流史論」一〇七頁
- 2 赤松俊秀「西方指南抄について」（塚本博士頌壽記念佛教史學論集）

- 3 眞宗源流史論一二四頁
- 4 昭和新修法然上人全集四一五頁
- 5 淨土宗全書第九卷四五三頁

新刊紹介（八）

立正大學日蓮教學研究所編「日蓮教團全史上」

第一部 日蓮宗上期教團の展開

日蓮聖人とその教團／聖人入滅直後における教團／日蓮宗上期教團の展開／上期教團の制度

第二部 教團中期の展開

第一篇 南北朝・室町時代の教團（前期）

京都教團の展開／諸門流の伸張と分立／諸門流の折伏・諫曉活動／中期教團展開の特異性／法華一揆の形成と天文法難／教團の諸制度

第二篇 室町末・安土桃山時代の教團（後期）

京都還住と諸寺の復興／門流和融運動の再燃／織田信長時代の教團／豊臣秀吉時代の教團

A 5 本文五七五頁 平樂寺書店刊
定價二、五〇〇圓